

第47回新潟画像医学研究会

日時 平成14年6月1日(土)
午後2時～
会場 新潟大学 有壬記念館

I. 一般演題

1 画像診断上、悪性リンパ腫を思わせた glioblastoma の1剖検例

登木口 進・関 雅也*・小松 憲章*
岡本浩一郎**・稲永 親憲***
高橋 均***・柿田 明美****
小千谷総合病院神経内科
同 MRI室*
新潟大学医学部附属病院放射線部**
新潟大学脳研究所病理学分野***
新潟大学脳研究所脳疾患標本解析学
分野****

脳原発悪性リンパ腫は、典型例では画像診断上の特徴として、壊死を伴わない造影される充実性の腫瘍で、特にMRIではT2-WIで灰白質と等からやや低信号、拡散強調画像で高信号ADC mapで低信号を呈するのが特徴とされ、シンチグラフィでガリウムの集積がみられる。今回、上記特徴を有した頭頂葉皮質下の充実性腫瘍を経験した。ステロイドによる縮小はなく増大により腫瘍の一部に小さな嚢胞性変化が見られた。剖検により細胞密度の高い血管内皮細胞の増生を欠いた小壊死巣の散在したGFAP陽性glioblastomaと診断された。

2 Perineural extension で発見された顎下腺腺様嚢胞癌のCTとMRI

古澤 哲哉・岡本浩一郎・石川 和宏
森田 哲郎

新潟大学医学部附属病院放射線部

腺様嚢胞癌(adenoid cystic carcinoma; ACC)は、perineural extension (spread) を示す腫瘍と

して知られているが、我々は顎下腺のACCが顔面神経を介し、側頭骨の中耳から内耳に腫瘍を形成した症例を経験した。顔面神経の下顎縁枝と頸枝は広頸筋の下を走行しており、これらを介して顎下腺のACCがretrogradeに側頭骨内へ腫瘍を形成したと考えられた。Perineural extensionを来した患者の35～40%は無症状とされ、CTとMRIによる画像診断のはたす役割が大きい。頭頸部の画像診断において、神経孔(管)の拡大、破壊、脂肪層の消失、神経の腫大と造影など、perineural extensionを示唆する所見を、脳神経(特に頻度の高い三叉神経と顔面神経)の解剖とともに、習熟しておく必要がある。

3 新潟情報ハイウェイにも基づいた遠隔地医療分野での利用方法

海津 元樹

佐渡総合病院内科・画像診断科

平成14年4月新潟県厚生連佐渡総合病院に離島診療支援システム「テレラジオロジー」が導入された。これは総務省「地域イントラネット基盤整備計画」の補助金に基づく、「新潟情報ハイウェイ」事業の一環の医療情報ネットワーク分野における利用により実現したものである。

当院は地域医療と専門医療の責務を島民のために果たさなければならない地理的環境にあるが、専門医不足は深刻で、当科も例外ではない。そこでCT、MRIが関与した問題症例を新潟県立がんセンター病院もしくは新潟大学附属病院の専門医師にコンサルトし、適切な臨床的判断に役立てようと考えている。

さらに、上記施設との症例検討やCPCも開催可能となり、本システムは遠隔離島地域孤立した医療環境の改善に役立つと期待される。